

## 鳥獣の保護を図るための事業を実施するための基本的な指針の 見直しの主な内容

### 1. 変更案の考え方

鳥獣保護管理小委員会等でご意見やご要望のあった内容については、できるだけ基本指針の見直しに反映した（資料2において○で表記）。一方、基本指針で対応できないもの（例：法改正を要することや予算措置での対応となるもの）については、別途小委員会報告としてとりまとめ、継続検討とする（●で表記）（また、制度に関わるものは平成24年度以降の法の見直しの際に反映）。

### 2. 見直しの主な内容

#### （1）生物多様性の保全

鳥獣の保護管理は生物多様性の保全において重要であり、生物多様性基本法や COP10 の成果を踏まえて推進。外来生物対策においても重要な役割を果たしていることを認識。

##### 【指針の変更点】

- ・ 鳥獣保護管理は生物多様性基本法の趣旨を踏まえることを規定（Ⅰ. 第一. 1）
- ・ 鳥獣保護管理が COP10 愛知ターゲットの達成に向けて重要な要素であることに留意することを明記（Ⅰ. 第一. 1）
- ・ 鳥獣保護事業が適切に実施されなければ、シカの増加の影響による植生被害や裸地化等のように、生物多様性が損なわれるおそれがあることを明記（Ⅰ. 第一. 3. (1)）
- ・ 外来鳥獣の捕獲促進のため、有害鳥獣の捕獲許可等において外来鳥獣等については捕獲数の見直しを行うなどの措置（Ⅱ. 第四. 2. (1) ②他）

#### （2）特定鳥獣の保護管理の推進

特定鳥獣の管理においては、科学的・計画的な保護管理が重要であり、特定計画の推進等一定の成果はあるものの、人材の確保と育成、個体数調整を促進するための方策等の課題も明らかになっている。新たな体制検討の必要性とともに、地域ぐるみの活動の重要性を認識。

##### 【指針の変更点】

- ・ 鳥獣被害防止特措法、生物多様性保全活動促進法との連携・活用を記載し、地域ぐるみの活動推進の必要性を記載（Ⅰ. 第一. 1）
- ・ 鳥獣保護管理をめぐる現状と課題に、「有害鳥獣の捕獲」の項を設け、地域ぐるみで有害鳥獣の捕獲を図るために、狩猟者と地域住民との連携・協力や、狩猟者による技術指導等を一層推進することが重要であること、鳥獣行政と農林水産行政の一層の連携が必要であることを明記（Ⅰ. 第一.

2 (5))

- ・ 狩猟者の確保に努めるとともに、狩猟者のみに頼らない個体数調整の体制についても検討を進めることを明記 (I. 第一. 3 (2) エ)
- ・ 効果的な個体数調整のための捕獲技術について検討及び情報収集を行い、技術ガイドライン等により普及を図ることを明記 (I. 第三. 1 (2))
- ・ 確保を図るべき人材として、地域に応じた高度な捕獲技術を有する人材を加筆 (I. 第四. 1 (2). エ)
- ・ 都道府県の鳥獣部局と、鳥獣被害防止特措法に基づいて被害対策を実施する市町村が連携を図る旨を明記 (I. 第十一. 1 (2) ア, イ)
- ・ 鳥獣保護区における農林業被害対策のための捕獲を適切に実施することを明記 (II. 第二. 2 他)
- ・ 複数人により、銃器を用いないで有害鳥獣捕獲を行う場合において、その従事者の中に狩猟免許を有しない者を含むことを認める規定の追加 (特区制度の全国展開) (II. 第四. 3 (2) ①))
- ・ 空気銃による有害鳥獣捕獲、個体数調整のための捕獲の対象鳥獣の拡大 (II. 第四. 3 (2) ⑤) 他)

#### 【小委員会報告に記載すべき事項】

- ・ 人材の一層の確保と育成のための方策
- ・ 個体数調整を一層促進するための方策
- ・ 広域で連携しての取組を促進するための方策

### (3) 感染症への対応

高病原性鳥インフルエンザ等感染症対策は、生物多様性保全にも寄与するとともに、社会的経済的なニーズも大きいことから、積極的に推進。

#### 【指針の変更点】

- ・ 鳥獣保護管理をめぐる現状と課題に、「感染症」を設け、人獣共通感染症及び家畜との共通感染症について、公衆衛生、家畜、動物愛護管理行政の担当部局等と連携して実施することを加筆 (I. 第一. 2 (8))
- ・ 高病原性鳥インフルエンザ、口蹄疫等の野生鳥獣が感染し、人や家畜等に伝播しうる感染症について、鳥獣における発生状況等に関する情報収集に努め、必要に応じて鳥獣の感染状況等に関する調査や感染防止対策等を実施する旨を明記 (I. 第十)
- ・ 傷病鳥獣救護における感染症対策について、家畜伝染病への留意について加筆 (II. 第九. 4 (3))
- ・ 安易な餌付けの防止を図るとともに、餌付けや給餌を実施する際には、感染症の拡大、伝播につながらないように配慮することを明記 (II. 第九. 5)
- ・ 感染症への対応について、高病原性鳥インフルエンザ及びその他の感染症に関する対応について加筆 (II. 第九. 6)

- ※ なお、高病原性鳥インフルエンザについては、6月以降に「野鳥における高病原性鳥インフルエンザに係る都道府県鳥獣行政担当部局等の対応技術マニュアル」の見直し等に着手することとしている。

#### (4) その他

時代に即した鳥獣保護管理の促進を図る。

##### ① 愛がんのための飼養目的での捕獲

###### 【指針の変更点】

- ・ 愛がんのための飼養目的での捕獲については、昭和 32 年の鳥獣審議会答申において「本来捕獲を禁止すべき」、昭和 53 年の自然環境保全審議会答申においても「廃止することが望ましい」とされており、現在はメジロのみが許可対象となっているが、密猟を助長するおそれが指摘されていることから、原則として許可しないこととし、今後の例外廃止の方向性についても明記（Ⅰ. 第十二. 4, Ⅱ. 第四. 1 (2). ④. 4), (4))

##### ② 地方分権一括法に基づく項目の変更

###### 【指針の変更点】

- ・ 地方分権一括法案において、鳥獣保護事業計画及び特定鳥獣保護管理計画項目の整理等が規定されていることから、それに即して変更（Ⅱ. 第六. 7 他)

##### ③ 鳥獣保護区や鳥獣保護員制度等のあり方

###### 【小委員会報告に記載すべき事項】

- ・ 鳥獣保護制度全般（鳥獣保護区や鳥獣保護員制度等）が、狩猟圧が比較的小さくなっている現在の状況に即していないとの指摘があり、制度のあり方について検討を行う必要がある。